

## 序文

2020年度全国調査報告書を作成しましたので、皆様にお届け致します。

今はまさに新型コロナの時代であり厳しい医療環境のなかで多くの医療従事者がその対応に全力を尽くしていますが、一方で生命に直結する血液疾患の治療、造血細胞移植などの通常医療もおろそかすることはできません。第43回日本造血細胞移植学会総会も東京国際フォーラムにおきまして開催させて頂く予定となっておりましたが、新型コロナウイルスの影響により学会始まって以来初めて主にWebを利用したハイブリット型の学会（2021年3月5日（金）6日（土）7日（日）、オンデマンド配信は3月一杯）となりました。また2月3日に緊急事態宣言が3月7日まで延長されましたのでその宣言下での開催となってしまいました。皆様方と直接お会いして議論することは叶いませんが、Webを介してではありますが移植・細胞療法に関する最新情報の交換を多職種間で行って、その情報をもとに移植・細胞療法のさらなる発展に少しでも貢献できればと思っております。

2020年度全国調査報告書は膨大な数字とその解析からなり、一見すると数字の羅列のようにも見えてしまいますが、その数字の一つ一つが毎日超多忙な移植医が大変な思いをしながら入力して下さった貴重なデータそのものです。そしてそのデータを分かりやすく図表にまとめ上げて下さったのは日本造血細胞移植データセンターの皆様です。この報告書に貢献して下さった全ての移植医療に関わる皆様に心より深謝致します。

移植種類別報告件数の年次推移を見ますと、自家移植を含む移植総数は2017年5947例をピークとし2019年は5860例とほぼ横ばいでした。血縁者間移植は骨髄移植と末梢血幹細胞移植がおよそ1:3の割合ですが総数としてはほぼ横ばいのようなようです。HLAハプロ一致移植が急速に普及してきていますので今後の移植総数の増加が予想されます。非血縁者間移植では末梢血幹細胞移植が増加してきていますがその割合は欧米と比較して少なく骨髄移植の4分に1程度です。臍帯血移植は2019年1380例と過去最多を記録しています。

今後は骨髄非破壊的前処置を用いた高齢者を対象とする移植や、移植後シクロクロス（PostCy）を用いた血縁者からのHLAハプロ一致移植がさらに増加していくものと推測されます。また非血縁者間末梢血幹細胞移植も欧米ほどではないにしろ徐々にではあっても増加傾向です。

日進月歩の移植領域においては、どのようなドナーさんから、どのような前処置を用いて、どのようなGVHD予防法で移植を行うかの判断は必ずしも容易ではありません。そのような状況の中でこの全国調査報告書は現時点での日本の造血細胞移植の現状とその成績を毎年更新して詳細に解析してくれています。この全国調査報告書が移植担当の先生のみならず移植を受けられる患者さんとそのご家族皆さんの参考となり、日本の移植医療の発展にお役に立つことを心から願っております。

2021年2月3日

第43回日本造血細胞移植学会総会会長 田中 淳司  
東京女子医科大学血液内科学講座 教授・講座主任